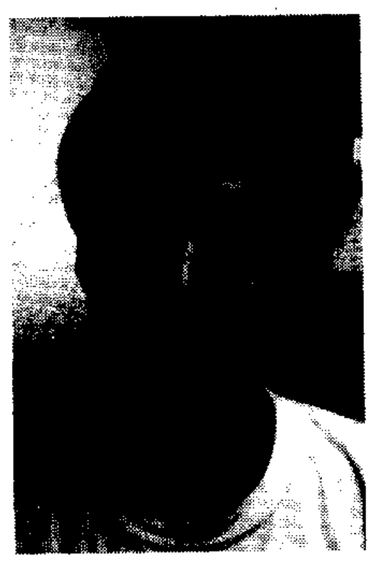
レビュー　R　E　V　I　E　W

『日本の科学者』2009年1月号の 南雲和夫論文に反論する

「9.11」事件は，多くの未解明の問題がある．火災を主原因とした自重崩壊とされる世界貿易センター第1，2ビルは，ビルを押し潰したという上層部の存在が認められない．ペンタゴンに追突し，さらにペンシルバニア州に墜落したとされる両機も，現場に残されたエンジンなどの残骸の影像は皆無である．それらの謎の解明を試みるのは，南雲氏が言うような「陰謀論」ではない．



戸田　清　成澤宗男

はじめに

『日本の科学者』2009年1月号に掲載された南雲氏の「『9.11テロ』陰謀説に対する批判的検討――自作自演説は立証可能か」を拝読した．成澤の著書が引用され，また書名のみへの言及であるが成澤と戸田が執筆陣に加わっている『9.11事件の省察』の評価にも関連するので，両名で言及させていただく．

まず表題に反映されている南雲氏の問題設定の仕方に大きな違和感がある．ブッシュ前政権の公式見解は「陰謀説」ではないのだろうか？ 公式見解もまた「アルカイダ陰謀説」とでも呼ぶべき陰謀説である．これに対する異論は「米国政府関与説」すなわち「米国政府陰謀加担説」である．つまり米国の神学者グリフィン博士が指摘するように，「9.11論争」とは異なる類型の陰謀説同士の論争なのである[1]．また，公式見解の対立概念は「自作自演説」なのだろうか？ われわれは，公式見解の対立概念は「米国政府関与説」であると思う．

南雲氏の「注および参考文献」を見て驚かされるのは，グリフィンの邦訳[2]と童子丸の著書[3]（いずれも2007年9月11日刊）への言及の欠落である．つまり先行研究調査の重大な手落ちではないだろうか．そもそも南雲氏は「陰謀論」批判の前に，FBI（連邦捜査局）がオサマ（ウサマ）・ビン・ラディン首謀説を首肯していない[4]ことを知らないのだろうか．しかも論文では，「3 上記の主張をどう見るか」に象徴されるきわめて不正確な事実認識の多さが目に付く．このため，「『陰謀論』に加担することの危うさ」なる主張については，われわれはここでは論評しない．以下「3」について集中的に論じる．

1　WTC1，2について

ここで問題になっているのは，両ビルの崩壊が，米国立標準技術研究所（NIST）の主張するように「自重崩壊」なのか否かという点に他ならない．すなわち，崩壊時の映像や写真で確認できるように，①自由落下速度に近く，加速度をともなうほど崩壊のスピードが速い，②終始シンメトリーを失っていない，③ブロック状になったコンクリートが残骸の現場で見出しがたく，大半が粉末状になっている，④建物内部の下層階の大部分が，激突した飛行物体の衝撃や火災による構造上の劣化とは無縁であったにもかかわらず，落下してくる上層階に抵抗を示した形跡がない，⑤前記④にもかかわらず，崩壊時において鉄骨部材が水平方向に，しかも高速で飛翔している，⑥「自重崩壊」

キーワード：世界貿易センター（World trading center），
国立標準技術研究所（National institute of standards and technology），
米連邦捜査局（Federal bureau of investigation）

であれば下を押し潰すはずの上層部の建物の存在が不可欠となるが，途中でなぜかそれが消滅しており，残された残骸の現場でも確認できない――といった事実がある．ゆえに，そうした現象が重力のみがもたらす「自重崩壊」で可能なのか，否かが問われている．

そして上記現象をより合理的に説明しうると考えられるからこそ，爆破が想定される根拠が存在すると思われる．いきなり，「爆弾によって倒壊した」か否かが問題の焦点であるかのような設定自体が，これまで米国や日本で繰り広げられている現実の議論をまったく反映していない．したがって，南雲氏が「『火災で崩壊した』のではなく，『激突のダメージと火災の拡大』とが相俟ってビルを倒壊させた」という「公式見解」を対置しても，上記のような不可解な現象を説明するための議論とは無縁である．繰り返すように最も疑問とされているのが，「倒壊」の様態が「自重」だけでは説明できないという点だからだ．

加えて，「WTCの鉄骨はビルが崩壊する前から湾曲しており」などという記述は，正確ではない．「湾曲」はWTC2の東面の80階から82階にかけての外周鉄骨で客観的に確認しうるが，ビル全体の鉄骨が「湾曲」を開始したのではない．

さらに「ビルの倒壊は鉄の融点に達しなくても起こりうる」というのなら，では何度の熱に「鉄」がさらされれば「倒壊」は「起こりうる」のか．「鉄」が強度の半分を失うのは600℃以上だが，NISTの「Final Report on the Collapse of the World Trade Center」（引用元）では，「（ビル内で）600℃以上に達した証拠はない」と断じているのみならず，そこで言及されている「鉄」が曝された温度は「250℃」程度とされる．つまり，「ビルの倒壊」に至るには程遠い水準であった事実を自ら認めているが，南雲氏はこの「公式見解」をどう受け止めるのだろう．

このように，「自重」だけで上記の現象がまったく説明困難である以上，説明の有力な仮説として何らかの爆破といった人為的な工作が疑われる余地がある．無論，爆破があったという完全な論証も困難である．だが，論証できなければブッシュ前政権の「公式見解」に対する批判または懐疑論が成立しないのでは決してない．

それゆえ，「ビルを仮に爆破，解体したのであれば，上から下まで爆弾を爆発させるために上部から滑り落ちるように崩壊していくのに，WTCではその現象が見られない」などと主張しても，懐疑論への何の回答にもならない．「現象」というのであれば，実際の映像で確認できる上記のような「自重崩壊」では説明できない事実こそより問われるべきではないのか．

南雲氏は，可能性としての爆破など人為的な工作の関与を否定する根拠として，「『消火活動に居合わせた消防士は，“爆弾のような音がした”といったのを，“爆弾が爆破したのです”と意味を変えて引用された』と証言している」という論拠をあげる．だが，わずか「消防士」1人だけで，「批判的検討」が事足りるとするのはおよそ無理がある．それどころか，『ニューヨーク・タイムズ』紙2005年8月13日付に掲載された「The Sept 9.11 Records」における503人の消防士や緊急医療技術士らの少なからぬ証言[5]は，何らかの形でWTC 1と2での「爆発音」の存在を示唆しており，しかも「引用された」などというクレームを残していない．そのごく一例を提示しよう．

「まさに，爆発があった．ビルを爆破した時，テレビの世界のようだった．爆発はベルトのように，ビルの周囲をめぐって発生した」（Richard Banaciski消防士）

「（WTC）第2ビルで爆発があった．…私は，注視し続けた．各階にわたってだ．あちこちに爆発が起きて5階でも起きた時，私は爆弾だと思った．なぜなら，それらは同時に発生するよう意図されたもののようだったからだ」（Kenneth Rogers消防士）

「（WTC 1の）真ん中あたりで，オレンジ色と赤色の閃光がひらめいた．最初は，1度だけのようだった．そしたらこの閃光がビルのあちらこちらでも見られ，ビルが爆発し始めた．ボンボンという音が響き，最初はオレンジ色だった

のに赤色に変わった閃光がビルから飛び出し……これらの爆発はどんどん大きく音も高くなっていった」(Karin Deshore 緊急医療技術士)

「爆発を聞いて見上げたら，3階だと思うが爆発があった．アンテナが落ちてきた」(Kevin Gorman 消防士)．

これ以外にも，「9/11 Survivors and Family Members Question the 9/11 Commission Report」[6]で示されているように，爆音については消防士や緊急医療技術士以外にも，飛行物体の激突前から現場に居合わせた通行人やテレビ局のレポーター，ビル内の会社員など多種多様の人びとの証言が数多く残され，そのうちビルの管理人だったウィリアム・ロドリゲス氏など何人かの証言は子細を極めている．ブッシュ前政権の「公式見解」の肯定者たちは，彼らをも「陰謀論者」と見なすのか．

また「『爆弾の炸裂したような音』＝『爆弾が炸裂した』のではない」のは一般論として当然だが，爆弾の破裂には通常爆音と閃光がともなう．ビル内部で以上のように爆音を聞いた証言者が多数いる以上，そうした一般論を並べても爆破自体の可能性を完全に否定する根拠にはならない．閃光については，上記の目撃談以外にもいくつかの映像で崩壊中のビル内部にそれと酷似した現象が記録されている．

2 WTC7について

南雲氏は，「航空機の激突で崩壊した二つのタワーの破片を浴びてヒビが入り，そのうえ大規模な火災に襲われて崩壊した」と説明する．まず，事実認識の誤りから正す．「ヒビ」が入るというほどの「破片」(注＝NISTが使うdebrisについては「残骸」がより正確な訳語)が落ちてきたのは，距離からしてWTC 1からだけに限られ，決して「二つ」ではない．おそらく南雲氏は，七つのビルからなるワールド・トレード・センターの敷地図すら目にしてはいないのではないか．「NIST's Response to the World Trade Center Disaster」(2005年)[7]でも，WTC 7が「WTC 2からの残骸」から受けたダメージは，「南側の窓ガラス」の「破損」程度とされる．

2008年8月21日にようやく公表されたWTC 7崩壊に関する最終報告書「WTC 7 Investigation Finds Building Fires Caused Collapse」[8]では「火災が主要因」と断じ，「ヒビが入り，そのうえ」というような理解ではまったくない．そもそも「ヒビ」というが，南雲氏は外壁のどこにそれを認めるのか．また，NISTすら，「8階から18階の南西角」が一部欠けたダメージなどの写真は公開しているが，「ヒビ」が発生したのを示す写真・映像を公開した例はない．さらに外壁の「ヒビ」よりは，内部の25本の支柱のそれの方がビル全壊の主要因と想定されうるだろうが，支柱に「ヒビ」が入ったという根拠は何なのか．風評以外でその存在を客観的に証明するものは，今日まで皆無である．

加えて，「大規模な火災に襲われ」たと南雲氏がいうような事実もない．この最終報告書の致命的欠落点の一つでもあるが，上記「NIST's Response to the World Trade Center Disaster」では，規模はともかく「確認された火災」として場所を特定しているのは47階中計11階に留まっていた事実を認めている．これで，どうして「大規模」なのか．また，位置関係からWTC 1からのダメージがほぼなかった北側，および西側の大半については，崩壊直前の映像では火災自体の発生がほとんど確認できず，「大規模」とはほど遠かった．

火災によって崩壊したとされるビルの例は，世界でも「9.11」当日の三棟を除き存在しない．にもかかわらず，WTC 7に関しても①崩壊が開始され瓦礫の山になるまでに要した時間が約6.5秒(注＝6.2秒という説もある)という，「WTC 7 Investigation Finds Building Fires Caused Collapse」でもその事実が認められた建物内部の抵抗を感じさせない――これは建築工学上ありえない――自由落下に等しい異常な短さ，②終始建物全体のシンメトリーが崩れず，残骸もほぼ一定の範囲に収まっていた不自然さ――が認められる．この事実はWTC1, 2と同様，NISTが強弁する

ような「火災による自重解体」では決してあり得ないという点がかねてから指摘されている．

当然，「WTC 7 Investigation Finds Building Fires Caused Collapse」で示された「東側で発生したコア支柱の崩壊が西側に向けて急速に連鎖反応的に伝わり，ビルの支柱構造が全面的に崩壊した」なる解説も，崩壊がビルのシンメトリーが維持されたまま瞬時に生じた事実と根本的に矛盾する．こうした「公式見解」に疑問が提出されているにもかかわらず，「ヒビ」と「大規模な火災」というまったく根拠が欠落した項目を列挙しても，何ら「批判的検討」に値しないのはいうまでもない．

3　ペンタゴンについて

「2」の (4) では，アメリカン航空 (AA) 77 便に関する「陰謀論」の「要点」が，「突っ込んだのはミサイル」説だとして，その根拠を①衝突の穴，②「機体の残骸や乗客の荷物」，③操縦した「犯人」の技量――の 3 点にまとめられている．ところが肝心の「どう見るか」という「3」では，この③がなぜか突然 WTC 7 の話に移っている．③こそ，ブッシュ前政権の AA77 便に関する「公式見解」の根拠を疑わしめる重要な論点であり，これでは言及する範囲が狭まってしまう．

だが，ともかく①から述べてみよう．「(3) については，全米土木学会の報告書には激突した穴は 38 m と報告されている」というが，自身が「2『陰謀論の要点』」で設定した (3) の項目は，WTC 7 のことではないのか．当然 (4) の間違いだろうが，上記③も含め，他者を「批判的に検討」するのであれば，順番ぐらい正確な記述を心がけるべきだろう．(4) だとして，そして「穴」が「38 m」だとする．しかし，機体が衝突したとされるのは斜め 45 度前後の角度だという．ならば計算すると，実際には機体の幅に対し 20 m程度しかない．実際，全米土木学会が作成した「THE PENTAGON BUILDING PERFORMANCE REPORT」[9] にある激突時の図と照合してみても，左右の主翼の先半分と垂直尾翼の大部分が，「穴」の範囲からはみ出している．しかもこれらが衝撃で吹き飛ぶなどしたとしても，建物の「穴」周辺には傷跡すら認められず，尾翼の激突想定部分に至ってはガラス窓が無傷である．「穴」が「約 5m」，「4.2m」でなく「38m」だとしても，何の回答にもなっていない．

さらに，「ボーイングの機体の残骸はペンタゴンの事故現場に散らばっている」と断定するが，その根拠は何か．ブッシュ前政権が機体の残骸について当初の高熱で vaporized（蒸発した）から pulverized (粉々になった) と用語を変えて説明している不自然さは置くとして，最も激突から時間が近接した現場の写真では，「散らばっている」「残骸」はまったくといっていいほど確認できない．のみならず，激突時に発生したはずの炎の噴出にともなう「穴」前方の焼け跡も同様である．

ところが，時間の経過とともに「残骸」とされる写真が撮られているのは奇妙というしかないが，しかもそのほぼ大半が「穴」の周辺ではなく，そこから離れたヘリポート・タワーの「穴」から見れば影の部分や，その北側に集中しているのはいったいなぜなのか．

特に，よく「証拠」として登場する衝突現場の前方付近にころがったアメリカン航空のロゴの一部らしきものがうかがえる機体の破片とおぼしき写真があるが，同一の「破片」であるはずなのにころがった場所の位置が異なる．それがなぜか 2 種類存在する．それを考慮すれば，「事故現場に散らばっている」「残骸」を当局発表そのままに信じるのはきわめて安易だろう．

ペンタゴン内部についても同様で，「20 番目のハイジャック犯」と報じられたザカリアス・ムサウイの裁判で，FBI が提出した「United States v. Zacarias Moussaoui Criminal No. 01-455-A」における国防総省内部の事故現場写真[10] でも，AA77 便と特定できるような「残骸」の写真は存在しない．もし pulverized となったとしても，他の公表された写真・映像も含めて同機の巨大エンジン，胴体，主翼の「残骸」の一部程度は建物内部にあってしかるべきだが，そのように明確に特定できるものは皆無である．

しかも「穴」を問題にするのであれば,「2 『陰謀論』の要点」で入り口となる外壁の「38 m」のそれのみならず，出口について言及しないのは不十分ではないのか．すなわち pulverized といいながら，ブッシュ前政権の発表では外壁に激突後，5棟からなる国防総省の建物のうち，3棟（注＝外側から3棟までが1，2階部分で結合）を貫通し，「Cリング」と呼ばれる最後の棟に到達して，直径3メートルの円形状の穴を外側に開けたという．

そこまでのダメージを与えるのが可能であったなら，穴の外側を抜けるまでにある程度まで強度と量を失わない機体が存在せねばならないが，そうすると pulverized と矛盾するのはいうまでもない．事実，そうした状態の機体の検分記録も写真も存在せず，穴が生じた原因についても，前政権の側からいかなる納得しうるような説明もない．

加えてエンジンを除く機体自体が脆弱なアルミ合金で製造されているのを考慮すれば，この報告書が述べるように「衝撃で機体の先端が基本的に破壊されたが，胴体部分がビルを通過して穴を開けた」などと，最初の外壁の貫通から「Cリング」の穴まで，すべて同機で説明するのは無理がある．しかも FBI によれば,「Cリング」の内部に pulverized したはずの機首部と尾翼の「機体残骸」,多数の「乗客遺体」があったのだという．「Cリング」を貫通したからこそ外側に穴があいたはずである以上，これを信ずるに足るとする合理的理由はないだろう．

なお,「乗客遺体」については「DNA の抽出」以前に理解に苦しむ点がある．これまで公表されたペンタゴン内部の現場写真として，計4枚，5人の「遺体」だというそれらが含まれている．そのうち3人については着衣の状態が確認できるから,「遺体の損傷は激しく」と断言できるまでではない．これは，機体残骸が vaporized や pulverized したという理由で残存していないとの説明とまったく矛盾する．しかも，シートの写真は見あたらない．機体残骸の存在を不可能にするほどの高熱が発生したはずの状況下で，なぜこのような「乗客遺体」が確認できるのだろうか．

もっともこの3人が内部で工事をしていた作業員の可能性もあるが,「乗客遺体」が「Cリング」内にあったというなら，なぜ写真が残っていないのだろうか．

4 ユナイテッド航空93便について

まず,「墜落したペンシルバニア州シャンクスビルの現場には，航空機の残骸が大量に散らばっており」という認識には，驚かざるをえない．大手通信社や「United States v. Zacarias Moussaoui Criminal No. 01-455-A」の93便の「現場」写真で,「航空機の残骸が大量に散らばって」いるのを示すものは皆無である．もし存在するのであれば，ぜひ出典を明示されたい．確かに「航空機の残骸」らしきものの写真は数点公表されているが, 93便とは特定できず, とてもではないが「大量に散らばって」はいない．ましてや,「航空機の残骸，ブラックボックスなども地中から発見され」たのを明確に示す写真・映像，および事故現場の実況報告書もなぜか存在しない．

こうした点が，通常の世界各地でこれまで発生した旅客機事故とまったく様相が違う異常さなのだ．それゆえ「墜落」という事実そのものが疑われる所以だが，公表されている墜落機によってできたとされる「穴」についても同様である．これまで,「穴」から主翼や胴体といった巨大部分を含め，機体の何らかのパーツが確認できる写真は皆無だ．しかも「墜落直後」とされながら，そうした写真には「穴」における青い雑草の生育が認められ，ゆえにそもそもこの場所が，火災をともなっていたはずの「燃料を積んだ大型旅客機の墜落現場」なのかどうか，きわめて説得力に欠ける．

また，公表された「証拠写真」には，エンジンの一部らしきものがパワーショベルでどこかわからない浅めの地中から掘り起こされているものが1点，さらに，地面に置かれたフライト・レコーダーとおぼしき写真が1点ある．だが，通常作成される事故現場の実況報告書も存在しないので，これだけでは何とも断定しがたい．つまり93便

のケースは，そもそも同機が「シャンクスビルに墜落した」という論議の前提となるべき事実が何ら確定できないのだ．にもかかわらず「航空機の残骸が大量に散らばっており，航空機の残骸，ブラックボックスなども地中から発見されている」と断じた根拠は何か．

したがって，「携帯電話」や「機内電話」の話を持ち出されても，「93便が墜落した」という事実確認が，上記の理由から今日まで客観的に不可能となっている以上，論議は進まない．また，当初FBIは，93便からの通話の発信は合計35回，うち「携帯電話」は13回と発表していた．ところが，ザカリアス・ムサウイの2006年の裁判では，「携帯電話」はなぜか2回に変更されている．通話記録の公表もない．しかも，2004年7月に刊行された「9.11調査委員会」の『報告書』では，なぜか「証拠」から削除されたはずの「犠牲者と遺族の会話」なるものが掲載されている．

「ブラックボックス」についても，2004年に遺族にだけ公開された際の録音内容が，2006年にザカリアス・ムサウイの公判で記録されているそれとはなぜか食い違っていた．さらに，写真らしきものがあるフライト・レコーダーについては，ボイス・レコーダーとは異なってなぜか公表されていない．こうした点から，「地中から発見され」たのだという「ブラックボックス」なるものが，93便が墜落したという事実認識の前提を裏付けているとはいい難いのである．

おわりに

「9.11事件」は，細部の説明困難な事象や「公式発表」の不整合性が目立つ．そもそもFBI自身がこの事件とオサマ・ビン・ラディンをはじめ「19人のハイジャック犯」を結びつける「確たる証拠」は存在しないと言明している以上[11]，事件があたかも懐疑の余地なく解決済みであるかのような立場こそ「非科学的」であろう．

注および引用文献

1) David Ray Griffin, The New Pearl Harbor, Olive Branch Press, 2004.（邦訳：グリフィン，きくちゆみ・戸田 清 訳『9・11事件は謀略か』緑風出版，2007）pp.40-42.
2) 前掲書1).
3) 童子丸 開：『「WTC(世界貿易センター)ビル崩壊」の徹底究明：破綻した米国政府の「9・11」公式説』（社会評論社，2007）.
4) 2009年12月現在もウサマ・ビン・ラディン（米国政府はOsamaではなくUsamaの表記を採用していることに注意）の容疑は「1998年の駐ケニアおよび駐タンザニア米国大使館へのテロで200人以上死者」であることが明記されている．つまり，「2001年のテロで3000人以上死者」の容疑は証拠不十分で，想定される法廷に立件できないのである．
http://www.fbi.gov/wanted/topten/fugitives/laden.htm
http://www.fbi.gov/wanted/terrorists/terbinladen.htm（FBI, November 2001, FBI TEN MOST WANTED FUGITIVE:Usama Bin Laden)
（最終閲覧日：2010年1月30日）.
5) 『The New York Times』（Aug. 12, 2005）.
http://graphics8.nytimes.com/packages/html/nyregion/20050812_WTC_GRAPHIC/met_WTC_histories_full_01.html
（最終閲覧日：2010年1月12日）.
6) Patriots Question 911, 作成年不明,Survivors and Family MembersQuestion,http://www.patriotsquestion911.com/survivors.html（最終閲覧日：2010年1月30日）.
7) NIST, August 2008, NIST Response to the World Trade Center Disaster
http://wtc.nist.gov/media/WTC7_News_Briefing_082008.pdf
（最終閲覧日：2010年1月30日）.
8) NIST, August 21 2008,NIST WTC 7 Investigation Finds Building Fires Caused Collapse,
http://www.nist.gov/public_affairs/releases/wtc082108.html,
（最終閲覧日：2010年1月30日）.
9) American Society of Civil Engineers, January 2003, THE PENTAGON BUILDING PERFORMANCE REPORT,
http://fire.nist.gov/bfrlpubs/build03/PDF/b03017.pdf
（最終閲覧日：2010年1月30日）.
10) US District Court Eastern District of Virginia, July 31,2006 United States v. Zacarias Moussaoui Criminal No. 01-455-A
http://www.vaed.uscourts.gov/notablecases/moussaoui/exhibits/
（最終閲覧日：2010年1月30日）.
11) Ed Haash, FBI says, it has "No hard evidence connecting Bin Laden to 9/11" http://www.informationclearinghouse.info/article13664.htm 等を参照.（最終閲覧日:2010年1月30日）.

（とだ・きよし：長崎支部，長崎大学環境科学部，環境社会学・平和学）
（なるさわ・むねお：非会員，『週刊金曜日』編集部）